

日本の水田と文化を刻み続けた『日本の米カレンダー』が来年で30年の歴史に幕を下ろす

- ▼1月は田んぼの土を使った備前焼の水差しで日本文化に誘い、5月は石川・能登の千枚田から棚田保全を訴える。英国の紀行作家イザベラ・バードが明治初期に絶賛した農村風景の素晴らしさを11月の山形県上山市の田園で再現し、12月はしめ縄で「米の文化」の永遠を願う
- ▼作者の富山和子さんが制作を手掛けた頃は、ウルグアイ・ラウンドで米の市場開放問題が白熱していた。農業を軽視する風潮に心を痛め、「切羽詰まった思いから」スタートを切る。農山村の四季折々を活写した12枚の写真にきれいな文章を添え、稲作文化再発見への思いを込めた。1990年から版を重ね、巻き起こった棚田ブームは世界にも知れ渡る
- ▼時を経ていま、TPPをはじめとする巨大な自由化の波が日本農業に迫る。富山さんの怒りが消えたわけではない。1年かけて、1万枚の写真を厳選し簡潔な文章で魂を吹き込む。
「その体力がなくなったのです」。よわい85。カレンダーは平成の歩みと重なる。
- ▼最終刊の表紙には、「先祖たちが営々と育んできたこの美しい自然と文化を、次の世代に送るために、どうしても農業を守りたい」とある。使命に終わりはない。